

雨の平和記念像の前にぬかずいて

蔭山澄子

中野一丁目

あの忌まわしい忘れられない日、四十九年目の原爆記念日の間もなくおとづれる。十年ひと昔と言うが、来年は早や五昔になろうというのに戦争の爪痕を身体に心に残されている私共被爆者には、国からは何の償いもなく、暖かい手は差しのべられないのである。被爆者の切なる願いで叫ばれている援護法制定がここまで来ても未だ難色を示している。

五十周年を目指して、被団協、東友会、全国被爆者の会全員一致で頑張っているが、この努力が実を結ぶ日を一日千秋の思いで皆さんの後について行動を共にしている。

あの日の体験を書き残すべきだとは痛切に感じてはいたが、私はあの爆弾（ピカドン）落下の直後の余りの恐ろしさに数日後、島原半島の北有馬の山奥、弟妹の疎開先へ逃げ出したのと、皆さんと異りその頃の記憶が定かでなく、頭の悪さを披露するのを躊躇しながらも、たとえ拙い文章でもと思いい切って寄稿した。

八月九日、私は学徒動員の一人として三菱造船所飽ノ浦給与

課で事務をとっていた。市街地の対岸棧橋近くのビルの三時で十一時二分、強い閃光、その直後物凄い音響と共に窓ガラスの破裂、驚きの一瞬、それでも咄嗟に机の下へもぐり込む。それから怒声、悲鳴の中をどうやって大勢と共に階段を下り裏の防空壕へ辿りついたのか無我夢中だった。

長崎は造船所を始め幾つかの軍需工場があったにもかかわらず、長崎港は俗に鶴の港と呼ばれ、周りを山に囲まれ、市街地はすり鉢の底を思わせ、爆撃しにくい地形だと言われ空襲にも見舞われなかったのだ。それが八月一日の空襲、たいした事もないだろうと防空壕にも避難せず、一階の食堂で待避していた私達は、その日始めてひどい爆撃に会い、今にも頭の上に直撃弾が落ちてくる様な生きた心地がしない思いをしたので、九日は尚更恐かったのだ。幸い爆心地より三キロメートル程離れた小さな建物だったので破壊されなかった。

屋内にいた者はガラスの破片で怪我した程度だったが、戸外で、坂の上にある監督庁に使いに出てた友は、坂の途中で爆風

で飛ばされ額など傷を負い、どうにか歩ける友と二三人連れ立って「恐ろしかったね、早よかえろ」鮑ノ浦と大波止を結ぶ通勤の定期船で？　ゾロゾロ大勢の後を急ぎ我が家へ辿りついた。家は無事で中学生の弟妹は帰って来たが、父は夜更けても帰らず山の中腹にある町会の防空壕の中から、赤く映えている爆心地の空を見上げ、一晩中まんじりともせず父の生死を氣遣っていた。

父は造船所へ勤務していたが、空襲の被害を最小限に食い止めるため、職場毎、分散疎開で長崎医大の近くへ移った直後で、思いやりが逆に仇あだとなった訳だ。翌朝うわさであの辺りは全滅と聞き、母は丁度疎開先へ行っているし子供達だけで途方にくれる。

叔母や母の親戚が心配して来てくれ、その翌日(？)、私、妹四人で探しに行く。途中すごい暑さ何とも言えない異臭いしゅうが漂い、喉のどが焼けつくように乾く。丁度、焼け野原の中に水道管が破裂して、蛇口から水が溢れているのを見付け、夢中で飲む。

近くに大きな馬が焼け死んでいるのに気付く、驚く。時折、人間かと疑うような焼死体を見かける。廃墟と化した医大の方の焼野原に、大木の幹を焼いた恰好の黒焦げの焼死体が沢山並べられている。ここの中から探してくれと言われたが、全く見当が付かないままに、金歯等を目印に、自信はないが、仕方なく一死体の骨の一部分を拾ってトボトボと帰路につく。

その後、父の知人が「昨夜こんな夢をみたのだが」と知らせて来て下さる。「私は今、寺町のお寺にいるのだが、家の者が誰も連れに来てくれないので、帰れなくて困っているから、家の者に伝えてくれ」と父が言ったそう。

疎開先から急ぎ帰っていた母は、半信半疑で行ったところ、父の名前のついたお骨が安置されていて、驚きと有難さに、今までは迷信と片付けていた怨念おんねんという言葉をしみじみ考えながら、皆さんに感謝しつつ帰って来た。胸の名札でわかったらしく、一瞬パツと伏せたのであろう。家族に引き取られない仏様は数多くいる中に、それだけでも父は幸いだったと思う。

また、いつ空襲があるかわからないので、皆で一時疎開先へ逃げようと、汽車が動いている所まで歩き、父のお骨と親子四人やつの思いで田舎へ落着く。そこで父の葬式をすませる。十五日に終戦を知らされ、広島、長崎の原子爆弾の被害の大きさに、もうこれ以上の犠牲は出せないということで降伏したのでろうが、犠牲になった父や全市民は浮かばれないと、口惜くちやくし涙にくれる。しばらく虚脱状態が続き、色々なうわさ、デマに惑わされながら、大黒柱を亡くした以上遊んでもいられないので、私と弟が一足先に長崎に帰ってみた。

私の学校は焼け、私達は三月の卒業を後一年と延ばされたので、とうとう卒業式もなかった。

十月から勤め始め、二四年結婚と同時に主人の勤務の関係で

上京、以来中野に住み付き、中野から離れられない。

私が最初長広会に出席した頃は次男が一歳数ヶ月で、新宿御苑で皆さんと一緒に抱いて撮った写真があるが、その次男ももう父親になった。当時は河野先生を会長とし、奥様を初め、役員の方々が発足間もない会を一生懸命骨折ってこれまでにして下さり、その後を藤平会長が引き継がれ、現在は援護法制定に日夜邁進まいしんされている。

私は仕事を持っていた関係で、今まで請願行動の参加等には出なかったが、年と共に身体も弱っているが微力ながら行動にも参加している。外見は丈夫そうに見えても、被爆者は弱っている。癌に罹りやすいと言われ、私の親戚の老人なども幾人も癌で、何年も入院生活を送っている。

生きているというだけで本当に可哀想だ。私も年忌毎に墓参りに帰っているが、最後(?)の年忌になるのだ。亡くなった人達の償いの為にも、幸いにも生き残った被爆者が余生を安心して暮らせる補償を切に願うのみである。

私事で恐縮だが、九州の旅の団体旅行へ参加した時、最後に長崎へ降り父の墓前へ報告して来た。原爆資料館ではむごたらしい悲惨な写真、数々の被爆物と一緒に団体客も、こんなひどいとは思わなかったと、皆異口同音に言っていた。長崎は今観光ブーム、原爆をより知ってもらう為にも大きな役割を果たしている。

やはり長崎は雨だった。初めて夫婦で記念像の前にぬかづき、お父さんも援護法制定を見守っていて、と祈り長崎に別れを告げる。

